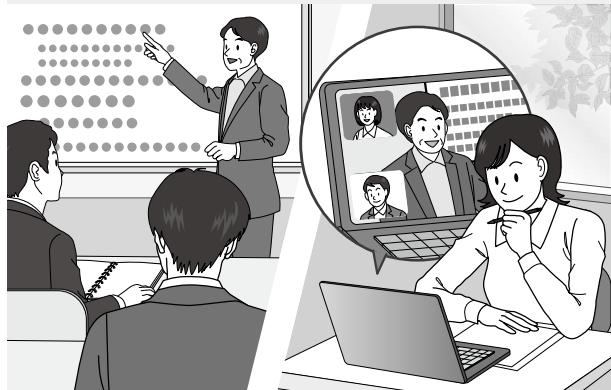


連載

進学塾に学ぶ ハイブリッド な教え方



第⑧回

【オンラインの研修】 オンデマンド学習 内製化のコツ②

市進ホールディングス
コンサルティング事業研究所 所長

細谷幸裕

ほそや ゆきひろ

1996年、株式会社市進入社。現場を経て、2005年より同社教育本部教務統括室にて講師養成に携わる。2008年からは全国の教育委員会・私学での教員研修の講師を務めるようになり、現在は企業・官公庁を中心に、「社内講師養成」、「OJTトレーナーのコーチング」、「説明力強化」などの研修・コンサルティングを行っている。



前回はオンデマンド学習の特性に着目し、内製化するうえでの講座やコースの設計ポイント、講義手法に関してお伝えしました。今回はオンデマンド学習教材の運用方法についてみていきます。

なぜ映像で合格できるのか

塾予備校では以前から映像を使った指導はありましたが、端末で個別に学習できる形態になったのは15年ほど前からです。それまでの映像学習は、大型スクリーンに投影された講義を集団で聴講する形でしたが、ここ最近は、1人1台の端末が割りあてられ、自分のペースで学習できるというのが一般的です。

受験において、映像学習で本当に合格できるのかと問われれば、答えはイエスです。ただし、映像教材の運用によって合格させることはできますが、映像だけで合格させるのはなかなか難しいというのが基本的な考え方です。どういうことかといいますと、映像学習をさせる際は、どこかの場面で必ず人がかかる必要があるということです。つまりは見放題のコンテンツであっても、「見つ放し」、「見せっ放し」ではその効果が得にくいということを意味します。

では、どのようにかかわればよいかといえば、映像学習においては、とにかく「学習する環境づくり」が重要になります。具体的には、どこで視聴するのか(場所)、何で視聴するのか(デバイス)、何から視聴するのか(コース選択・レベル選択)、どれくらい視聴するのか(学習量・学習範囲)、どのように視聴するのか(学習手法)など、学ぶ側にとっては映像視聴ひとつをとっても選択すべき事項がたくさんあります。これらを自分でマネジメントできる生徒であれば問題ないのですが、それができない生徒にはチーフャーのようなコーチ役がかかることで、効果的な学習が促進されるというわけです。

とくに塾予備校であれば、生徒が視聴する前の動機づけのコーチングや視聴後の振り返りの支援は、学習効果を最大化するうえで非常に重要なアプローチとなります。もちろん、社会人と学生とでは、学ぶ目的や動機づけの方法は異なりますが、視聴に至るまでの事務局側のサポートや映像学習のメリットを伝達する点

は、大人も子どもも共通しています。塾予備校の指導において、なぜ映像学習で合格できるのかというと、映像コンテンツの中身以上に、その運用手法、さらには学習者との視聴前後のコーチングが重要になっていくからということがおわかりになると思います。

ハイブリッドな学習形態

コロナの影響によって非対面での研修や学習が増える一方で、対面でしか効果を得られない研修も継続的に行われており、その棲み分けが明確になってきました。そのようななかで、これから研修や教育は、オンラインかリアルかといったどちらか一方のチャネル（学習形態）ということではなく、各チャネルの「いいとこどり」をしながら学習の最適化を図り、費用対効果を高めていく流れになっていきます。

そこで重要なのが、そのチャネルの組み合わせ方や学びのプラン（Learning Journey）をどのようにデザインしていくかという点です。今後、このデザインスキルは教育担当者に求められるスキルとなっていくでしょう。

一例としては、研修の事前課題として受講者に映像教材でのインプット学習をやってもらい、そのインプット情報をもとにオンラインライブで討議を行っていくようなコース学習を、ブレンディッドラーニングといいます。このブレンディッドラーニングに近い形は、塾予備校ではすでに個別・集団・映像のハイブリッドな組み合わせで行われており、非常に効果を発揮しています。

ただし、留意したいのは、学習チャネルが増えたからといって、この組み合わせありきでコースデザインをしてしまうと失敗しやすいという点です。なぜ組み合わせる必要があるのか、組み合わせることでどのような学習効果が得られるのかなどを検討することは、コースデザインの大前提となるため、まずは受講者の立場になって学びのプランを設計することが大切です。

メタ認知の必要性

オンデマンド学習を効果的に運営していくうえで学習環境づくりが大切とお伝えしましたが、この環境づ

図表 オンデマンド映像教材の運用のポイント

1 視聴前後の人の関与

→コーチングによる動機づけと転移促進の場面をつくる

2 ブレンディッドの質

→組み合わせが目的にならないよう学習効果に配慮する

3 メタ認知の推奨

→学ぶ内容だけでなく学び方の提供を図る

くりには学習機会を提供する事務局側が支援するだけでなく、学習者自身にも映像での学び方を習得してもらう場面が必要になってきます。たとえば、視聴時にメモをとりながら学習することを推奨するのであれば、メモはどのようにとればよいのかといった学び方のアドバイスが必要になるといったことです。学習者のなかには視覚で学習が促進される人もいれば、聴覚で理解したり、手を動かすことで理解につなげる人など、さまざまなタイプが存在します。そういう多様な受講者に対して、事務局側が学習者自身の個々の学習スタイルを認識してもらったり、個々の得意な学び方で学習してもらう方向につなげていく必要が出てくるでしょう。

このような最適な学び方やとらえ方などを、自分自身で客観的に知る能力のことをメタ認知といいます。学び方というのは、長年の経験のなかで無意識のうちに形成されたり、ものごとのとらえ方の癖が学習に影響をおよぼしている場合が多く、自分の学び方を知っている人はそれほど多くありません。そうしたなかで、自分の学び方や認識の癖を振り返り、客観視したうえで学習させるメタ認知の習得は、多様なチャネルが選択できる時代になったいまだからこそ必要な能力になっていくはずです。

*

次回からは4回にわたり、テストづくり（テストフォーミュレーション）の手法を使った学びの効果を解説していきます。